

異なる成長段階の感受性差評価(異なる成長段階での試験)

・生物は、一般的に成体の方が幼生よりも耐性が高い場合が多い。標準試験に用いられる生物は、魚類は稚魚、甲殻類(ミジンコ)は幼生である。ミジンコではライフサイクルが短いため、成体に対する影響も評価して個体群への影響を考慮する必要がある。一方、魚類はライフサイクルが長く、農薬の散布が繁殖期に該当する場合もあるため、ふ化仔魚に対する影響も評価する。この評価手法は、上記の生物のうち高感受性の生物についてのみ適用する。

・追加試験として、ミジンコでは7日齢の成体の48時間試験を実施、魚類はコイのふ化仔魚の周年入手が困難なため、メダカ仔魚(ふ化後24時間以内齢)の96時間試験を実施

・幼生と成体の各急性毒性値の幾何平均を幼体での急性毒性値で評価する、魚類ではライフサイクルが長いいため小さい急性毒性値を採用

